いのちと地域を守る

「津波来ない」は禁物

危機免れ痛感「早く逃げる」

南蒲生の住民の多くは、地震の後の津波襲来を予想していなかった。宮城野区蒲生霞沿の二瓶琢さん（47）の一家も避難が遅れ、間一髪で津波から逃れた。

震災の当日、琢さんは外出していたが、地震が起きた直後、自宅にいる義父母と長男を案じ、急いで帰宅した。ラジオは大津波警報を伝えていた。

自宅に到着すると、義父母は、落下物などの片付けをしていた。「津波なら来ない」と言い、逃げようとしなかった。琢さんも家の中のことが気になり、2階に上がった。

「津波が来ます。避難してください！」。派出所の警察官が家々を回り、避難を呼び掛けていた。その様子を見て初めて危機感を抱いた。義母と愛犬を車に乗せ、岡田小に避難した。

別の車に荷物を詰め込んでいた義父と長男は避難が遅れた。義父らが岡田小の近くまで行くと、屋上に避難した住民たちが叫び声を上げた。「津波が来た！」

「走れ！」。津波がすぐ近くまで迫っていた。2人は車から飛び出し、すんでのところで校舎に駆け込んだ。

当日は仕事で名取市にいた矢吹の妻さん（52）も「なぜか南蒲生の妻さん（52）も「なぜか南蒲生は、津波は大丈夫だと思い込んでいた」。午後7時ごろに自宅近くまで戻り、流れ着いたがれきや浸水の様子を見て血の気が引いたという。

夜には、岡田小で琢さんたちと合流し、家族全員の無事を確かめることができた。妻さんは「警報が出たら、少しでも早く逃げることが大切だ」と痛感した。

自宅は約2メートル浸水したが、ボランティアらの力を借りてがれき片付け、6月ごろから再び家族で暮らせるようになった。

日常を取り戻しつつあるが、琢さんは津波再来への不安が消えない。「自宅に戻る途中、七北田川の水が引いていたのが見えた。それでも津波を具体的にイメージできなかった。今考えると本当に怖い」。ラジオと懐中電灯、食料などを入れたリュックを用意し、万が一に備えている。

津波により、多くの家屋が全壊被害を受けた南蒲生地区＝2011年3月12日（二瓶均さん提供）

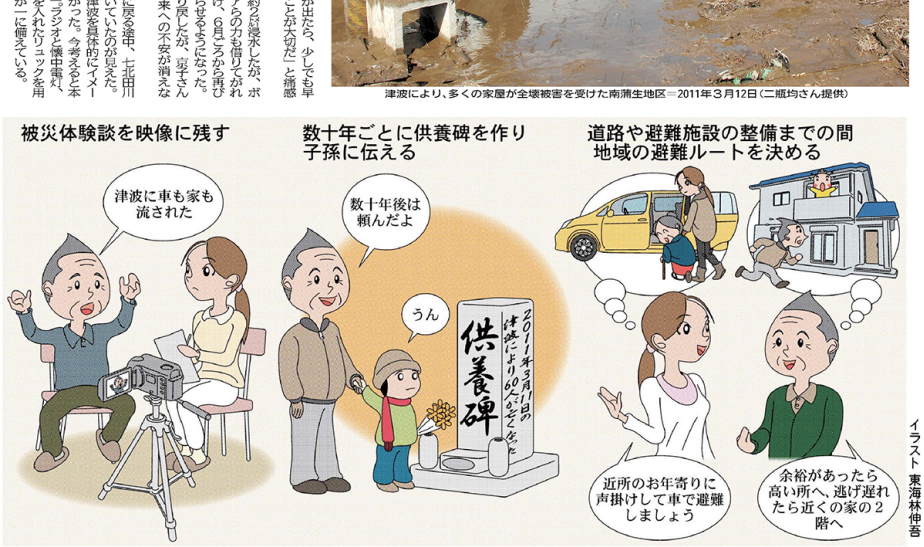

イラスト　東海林伸吾

■むすび塾に参加して

宮城野区　南蒲生町内会

【震災の伝承】視察した新潟県旧山古志村は、震災の記憶と記録を残すメモリアル施設が整備されていた。規模は小さくても、南蒲生会場にも同じような機能を備え、「記録を未来に残したい」

＝南蒲生町内会復興部・二瓶明美さん（50）

【避難訓練の課題】昨年1月、町内会で津波避難訓練を行った。アンケートは夜間や要援護者の避難に焦点を当てた訓練、車を使った訓練などを求める声が寄せられた。訓練の方法を模索したい。

＝南蒲生町内会復興部部長・芳賀正さん（65）

【参加して】正直に言って震災を忘れたいという思いがあった。むすび塾に参加して皆さんの意見を聞き、伝承していかなければならないと思った。

＝消防団員・我妻蔵人さん（39）

【参加して】町内会の活動を担ってきた先輩たちの意見を引き継ぎ、新しい発想と行動力でまちづくりに取り組みたい。

＝消防団員・遠藤幸治さん（39）

【車での避難】非常時は車で逃げたいが、渋滞で逃げないことも想定され、徒歩や自転車の方がスムーズな場合もある。ケース・バイ・ケースで考えるべきだろう。

＝南蒲生町内会復興部・我妻正一さん（64）

【非常時の不安】若い世代が地域から出ていしまい、消防団も欠員状態だ。24人定員のところ来年度は9人。このままでは万が一の時に活動できない。声は掛けているのだが、なり手がいない。

＝消防団員・佐藤護さん（39）

【地域の交流】震災を通し、コミュニティーの輪が一番大事だと感じた。去年は祝祭りを再開させたが、ほかにも住民が集る機会をつくりたい。町内会の先輩方にも協力してもらい、若手中心に取り組む。

＝えんの会会長・二瓶透さん（52）

災害対応 町内会単位で共有

減災・復興支援機構理事長　木村　拓郎さん

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人とのつながりを強め、防災・減災に結び付けてきたいとの思いを込めました。次回のむすび塾は22日、京都市伏見区の向島ニュータウンで開催します。

東日本大震災では家にいる高齢者を助けに行った人が亡くなったり、逆にそのままにして避難するなどの例があった。地域で基本的な考え方をまとめておく必要がある。

避難訓練のてこ入れも重要だ。震災発生から時間がたつと、危機意識が薄れ、参加率が低くなる。被災体験を共有したり伝承したりする機会があれば、訓練に目を向けさせるきっかけになる。

被災者が年を取る中で、いかに次世代に震災を伝えるか。体験談を語る様子を映像として残す方法は有効だろう。津波や避難状況だけでなく、復興の大変さも伝えたい。50年後、100年後の子孫への思いを巡らせてほしい。宮崎市には50年ごとに供養碑を建立し、江戸時代に起きた津波被害を350年の間、語り継いでいる地域がある。

避難所運営などの災害対応は、町内会が元気でないと難しい。町内会を楽しいものにすることが防災対策につながり、災害への抵抗力を増す。若手の奮起に期待したい。

防災は奥が深く、専門知識が必要だ。担当者を2～3人決めて、町内会単位で地区防災計画を練り上げ、仙台市の地域防災計画に反映させることにも挑戦してほしい。